LL教室を組み入れた中國語入門教育 第一年目

長谷川良一

1. はじめに

早稲田大學文學部1年生の中國語の授業では，今年も依然として『基礎漢語課本（日本名・新中國語・以下『新中國語』と省略)』1～3冊を教材とした授業がおこなわれているが（今年は1こまをO先生，3こまをわたしが擔當），今年度からあたらしい試みとして，わたしの擔當する2クラスでは，そのうちの1こまをLL教室を利用して授業をおこなうことをはじめた。

わたしがLL教室を使用して中國語入門教育をはじめようとしたのは，實は今回がはじめてではない。わたしが早稲田大學文學部で教えるようになって間もない1964年4月，文學部の1年の第1中國語（週3こま，1回100分）の授業の全責任をおわされることになったのを機會に，當時文學部にすでに設備されていた簡易ラボラトリーの施設を利用して，線畫スライド（視覺）と錄音テープ（聽覺）の組み合せによる目と耳と口による方法で，中國語入門教育についてのひとつの試みをはじめようと思い立ったことがある。それはその數年前C.C. Fries の Oral Approach の理論と I.A. Richards の Sen-sit の理論に影響されながら中國語入門教育の問題を模索しつづけてきたわたしがゆきついたひとつの結論であった。ただその試みは文學部の簡易ラボラトリー裝置の學生のヘッド・ホーンに到達する再生音質の惡さ（それは當時の技術水準の限界と文學部の簡易ラボラトリーの保守の惡さの兩者に起因していたと思われるが）に，實驗開始早早にして斷念し，普通教室の授業にもどらざるを得なかったのである（その間の事情については『不發におわったひとつの視聽覺教育——その覺え書き——』早稲田大學語學教育研究所紀要4・1966に詳しくのべてあるので，興味のある人はそれを讀んでいただきたい)。

もちろん，今度のLL教室を使用しての中國語入門教育の實驗は，前回の實

驗の意圖したものの再現ではない。前回の實驗では，新しく教材を用意し，毎回の授業を簡易ラボラトリー裝置を使用し，基本的には直接教授法の手法を用いた，完全なランゲジ・ラボラトリー裝置による中國語入門教育を意圖したものであったが，今回の實驗ではそうではない。すでに6年間つづけられている『新中國語』1～3冊による中國語入門教育の實驗をより効果的なものにするための試みであり，したがって授業全體からみれば，あくまでも補助的手段としてのLL教室の使用であるのである（全面的にLL教室を利用した中國語入門期の授業方式については，わたしは現在のところ，まずランゲジ・ラボラトリー裝置を使用しない普通方式の授業によって文型・語彙を導入して理解させ，それをランゲジ・ラボラトリー裝置を使用して練習させて着實なものにさせ，ふたたび普通方式の授業にもどってその運用を教師が確認するという流れをもつ，いわゆる延長展開方式をとるのが理想的だと考えており，もし將來條件が許せば，そのことをぜひ試みたいと思っている）。

2. この實驗の出發點

昨年度の報告（『「基礎漢語課本」實驗補遺（その２）』中國文學研究第13期・1987）の三の部分ですでにのべたように，今度の實驗の出發點になったのは，北京語言學院で作成されたビデオ教材『初級漢語課本』（全80課約4時間・日本發賣元中國語情報サービス）である。同教材は1980年に北京語言學院來華留學生三系で編集された『初級漢語課本』を基礎にして作成されたもののようで，『新中國語』1～3冊では學ばれない「你上哪儿？」の「上～」があらわれ，發音面では「这」はzhèi,「那」はnèi,「谁」はshéiが多用されているなど,『新中國語』の教授體系とは完全には一致していないが，基本文型や語彙の點ではかなりの部分で一致しており，すでに學ばれた『新中國語』の基本文型や語彙がどれぐらい自分のものになっているかを，自己検証させるには好適な教材と思われたからである。そこでわたしは昨年の報告の中でこう書いた。

それ（前述の1964年の實驗）に失敗したのちには，ランゲジ・ラボラトリーの効用はもっぱらテープを利用した音聲訓練の側面からだけ考えており，その後，急速に普及していったビデオについては，中國語入門のための適當な教材の出現もないままに，ビデオによる中國語入門教育の實驗は遠い將來

の問題としてしか考えていなかった。ところがこのたびの北京語言學院製作ビデオ『初級漢語課本』の出現によって，わたしのランゲジ・ラボラトリーにたいする考え方は變更を餘儀なくさせられたのである。すでにのべたように敎室ですでに學ばれた『新中國語』の基本文型や語彙を本當に自分のものとしてこなされているかを自己檢証させるためのものであるならば，2ヶ月に1度，また3ヶ月に1度のランゲジ・ラボラトリーの使用でも何ら差しつかえないのである。（中略）わたしはこう考えて，來年度からビデオ敎材『初級漢語課本』を『新中國語』の進度に有機的に結びつけて使用することにきめたのである（『中國文學硏究』第13期 p. 140〜141）。

文學部では1987年11月にビデオ放映も可能な最新式のフル・ラボラトリーが1敎室完成していた。わたしはこのような敎室を使用して授業をするのははじめてだったので，翌年の本格的な使用に備えて，操作にすこしでも慣れようと思い，LL 敎室試用期間内の1日を利用して，すでに『新中國語』3册のほとんどを學びおえた學生諸君にビデオ敎材『初級漢語課本』を時間の許すかぎり見せてみた。各ブースに2人1個あてのちいさな畫面があるほか，コンソールのある敎壇の大黑板の部分には大スクリーンが設けられていて，その畫面を見ていると，あたかも映畫を見ているようである。音聲は各ブースのヘッド・ホーンでも聽取可能であるが，天井や壁面の適所にスピーカーが埋められていて，敎室のどの席からでも，ヘッド・ホーンなしでも，明晰な音聲をききとることができる。また敎室の照明を部分的に調節すれば，大スクリーンの明晰度をそこなうことなく，各ブースではノートをとることを可能にするぐらいの照度にあげることができる。もちろん完全な空調設備もととのっていて，かつて使用した簡易ラボラトリー時代の不愉快さはかけらもない。はじめてこの LL 敎室にはいった學生たちは，その設備のすばらしさに，なんだか早稻田大學にいるような氣がしないと口口につぶやいていた。後日，學生たちにビデオを見た感想文を書かせてみたが，すべての學生がビデオを授業にとりいれることに興味を示し，歡迎していたことは，わたしに來年度の實驗にたいする確信をふかめさせた。

年があけて文學部で88年度の LL 敎室使用希望敎員の募集がはじまった。わ

たしのはじめの計畫では，時々ビデオ教材を見せるだけであるから，LL 教室の使用はせいぜい月１回ぐらいでよいと考えていたが，とりあえず，月，木，土のどの日でもよいから２クラス各週１回の使用を申し出ておいた。希望者が多くて回數がけずられることもあるであろうと豫想していたからである。ところが初年度である88年度はわたしの豫想していたよりは使用希望教員數がすくなく，わたしの授業に關してはＶクラスは月曜日の２時限，Ｗクラスは木曜日の２時限が使用可能ときまったのである。

3. 實験のための準備

ここで問題が２つおきた。ひとつは毎週１回の LL 教室の授業をすべてビデオ教材『初級課本』で費やすのは不可能であり，それ以外の時間を LL 教室を活用してどのような授業をおこなうかということであり，ひとつは LL クラスの教室使用可能の曜日が異るということであった。すでに觸れたように文學部１年生の授業週４こまのうち１こまをＯ先生に擔當してもらっているが，その授業が火曜日にあるのである。Ｖ，Ｗ２クラスの授業は『新中國語』を２人の教師が連續して使用，擔當する２クラスは同じ進度ですすめられているので，同じ曜日に LL 教室を利用してＶ，Ｗ２クラスの授業がおこなえるのであれば問題は比較的簡單であるが，今回のように曜日が異なるとなると，わたしにとっては月曜日と木曜のＶ，Ｗ２クラスの授業の內容をそれぞれ別のものに變えて實施せねばならず，さらにその間に火曜日のＯ先生の授業があるので，２クラスの進度をそろえてＯ先生にひきついでゆくとすれば，問題はいよいよ複雜なものになる。

わたしはかつて文學部の簡易ラボラトリーの施設を利用して授業をおこなった經驗はあるが，その LL コントロール・コンソールの操作はテープを回轉させるだけというきわめて簡單なものであった。しかしこのたび文學部に備えられた LL コントロール・コンソールはソニーの 5500 MK II という最新型のものであり，CRT ディスプレイと操作スイッチを一體化した新しい方式が採用され，必要に應じて必要なスイッチだけが畫面に映し出され，指で畫面を押すだけで，さまざまの機能を驅使できるというきわめて複雜なものである。わたしにとってはこれらはすべて未知の世界であり，フル・ラボラトリーの最低の

機能である，モデルの發話をヘッド・ホーンで聞いてそれをリピートさせ，その兩者の音聲を各自のブースのテープに同時に錄音させ，それを各自に比較對照して聞かせることによって，自己の發話の流れを正しい中國語の發話の流れに近づけるよう矯正させるという練習を，授業の流れのなかで，とどこおりなくスムーズに行なわれるよう，コンソールを操作することに慣れるのは容易なことではない。

2月一杯かけてあれこれと2つの問題の解決方法を模索したが，LL コントロール・コンソールの操作に習熟していない現在のような狀態では，たとえ2つの問題を解決する複雜なカリキュラムを組みあげていったにしても，實際に實施する授業中のコンソールの操作ミスによって授業がスムーズに流れず，時間のロスがおこなわれ，せっかく組みあげたカリキュラムのその授業時間におけるプログラムが消化しきれず，結果としてせっかく組みあげた複雜なカリキュラムもめちゃめちゃになってしまう可能性が大きいという結論に達した。

そこで，とりあえず88年度の授業においては，ビデオ教材『初級漢語課本』を見せるとき以外は，LL 教室用の特別の教材はつくらず，週1回の LL 教室の授業においても，基本的には普通教室の授業の形式を踏襲することにきめた。こうして2つの問題をいちおう解決した。ただ LL 教室を毎週使用しながら，その裝置をぜんぜん使用しないで授業をすすめることは，いかにも惜しいことで，寶の持腐れになる。それであれやこれや考えた末，ふと思いついたのが，『新中國語』の各課の頭にある「替换练习」の部分をテープによってリピートさせてみてはどうかということであった。これまでの普通教室の授業では各課の「生词」をテープを使用して練習させたのち，「语法」の部分の說明をおこない，「课文」に移るまえに，「课文」をスムーズに朗讀させるための一助として「替换练习」の部分は，テープを使用せず，學生を指名して1文ずつ入れかえていわせ，さらにその正しくいいかえられた文を教師がもういちど發音して，全員でコーラス模倣させるという練習方法をとっていたが，その「替换练习」の部分をテープにまかせ，LL 教室の授業では裝置によって練習させ，普通教室ではテープレコーダーから流れる「替换练习」を全員でリピートさせるという方法である。

ところで今のようにカセット・テープレコーダーが普及しないまえは，その

授業で使用するテープの頭出しが面倒だったので，能率をあげるため，わたしは3インチテープに各課ごとの教材を錄音しなおして使用していたが，カセット・テープレコーダーが普及したのちは，長時間のテープをそのまま使用し，テープについてリピートさせる場合にも，一時停止ボタンを使用しておこない，わざわざポーズをつけたテープを編集しなおすことをしないでいた。ところがLLコントロール・コンソールを實際に操作してみると，早送り巻戻しの速度がいずれも普通のカセット・テープレコーダーとは比較にならないほど高速で，畫面にはテープカウンターがついているが，その數字のところがあっというまに通過してしまい，必要部分の頭出しがきわめて困難であることが判明したのである。そこで，ただでさえコンソールの操作に神經をつかうLL教室の授業では，餘計な神經をつかわないためにも，その授業時間に使用される全プログラム毎に完全に編集されたテープが必要であることがわかった。

ずっと以前，ドイツ語のO先生から，早稻田大學語學教育研究所にはテープ編集用の機械があり，それを使用すれば，ポーズのないテープから，こちらの希望する形式のポーズをつけたテープを作成することができるときいていたので，『新中國語』の「替换练习」の部分だけを錄音しなおし，それにポーズを入れてもらうべく，同研究所視聽覺資料室のMさんに連絡したところ，Mさんの話では文學部で今度設けられたLLコントロール・コンソールでも，そのような編集が可能であるという。そこで取扱説明書をひらいてみると，たしかに教材編集のためのEDIT畫面がある。準備室の學生職員の人にいろいろ操作の方法をおそわりながら，數日間の惡戰苦鬪の末，ポーズをつけたテープを作成する畫面の操作をまがりなりに習得したが，當時はマスターレコーダー1とマスターレコーダー2の兩方を使用すればそれができることがわからず，錄音用には學生用のブースのテープレコーダーを使用し，さらにそのときはコンソールのボタンひとつで學生用のマイクがきれることを知らず，そのマイクを生かしたまま錄音したので，時折り用事があってLL教室にはいってくる準備室の人の聲がテープにはいり，家に持ちかえって聞きなおしてみて，あまりひどい部分は翌日また錄音しなおすという苦勞をかさね，それでもまだ一部分には人の聲が殘っていたが，どうにか曲りなりに授業で使用できそうな，ポーズのはいったテープが出來あがったのである。

ただマニュアルでポーズを入れる區切りにあらかじめキュー信號を記錄しておく操作方法がどうしても發見できず，ポーズをとるセンテンスの區切りをすべて機械にまかせたが，その文間空白選擇スイッチの空間設定のボタンが 0.5秒，0.7秒，1秒の3種類しかないので，その一番ながい1秒に設定しても，「替換练习」のテープにはセンテンスの途中で1秒以上の空白のところがあって，そこで機械が反應し，センテンスの途中でポーズがはいり，テープのみにたよってリピートさせる練習の場合には學生が戸惑うであろう部分がところどころできてしまったのである（このテープを將來も使用するとすれば，この缺點はぜひとも克服しなければならないと思っている)。

こうして春休みの期間一杯を利用して，わたしの88年度の LL 教室の使用計畫はしだいに固まっていったが，4月のはじめ授業開始直前になって，準備室のMさんのねばり強い利用調整作業のおかげで，とりあえず1學期については木曜日の1時限も使用が可能になり，1，2時限をつづけて使用することができるようになったのである。このことはすくなくとも1學期に關してはかねがね懸案であったO先生との進度調整の問題を一擧に解決してくれて，これからはじめられる實驗に明るい光をなげかけることになった。

4. 實驗の開始

例年の授業計畫では10回かけて中國語の發音の基礎をひととおり終え，そのあとは基本文型にはいってゆくことになっているので，發音の段階では2回LL 教室を使用できることになる。發音段階のビデオ教材として使用を考えたのは，日本大學でその前の年に作成された『發音編2』であった。このビデオは母音，子音，發音の比較からなりたつ約18分の教材で，『基礎漢語課本』の導入のしかたとは順序がまったく異っているが，北京放送局の張悦アナウンサーが出演していて，發音のときの口の動きが具體的にわかり，とくに，～n，～ng の發音の對比などはきわめてよくわかるように作成されている。そこで第3課を教えることになった第1回の LL 教室の授業では，その課で學ばれる～n，～ng の對立の發音の要領を，ビデオの ～n，～ng の部分だけをとりだして何度かくりかえして見せて，その導入にあて，第2回目では第7課を教えることになっていたので，その課をすっかり教えおわった段階で，中國語の發

全音體を初歩的に整理させるため，まとめとして發音編2をはじめから終りまで時間の許すかぎり見せた。ただそれ以外の發音の指導については，いままでの方法を踏襲していて，LL 教室の特色を生かした方法をとくに採用しなかった。この點は今後さらに研究しなければならない點だと思っている。

第3回目は基本文型の部分にはいった最初の課であったので，普通教室の要領で授業をすすめ，「替换练习」の部分だけ，すでにのべたような方法でラボラトリーの装置を使用して練習させた。またLL教室では實物投影裝置も備えられているので，その日の授業のしめくくりの段階で，普通教室では「纸」「本子」「钢笔」「铅笔」「圆珠笔」「墨水」などの實物を使用して問答形式で「～是～」「～不是～」「～吗？」の文型を練習させていたのを，實物投影裝置を利用してスクリーンに大きく投影して練習させたが，この練習は教室の隅々の學生にも實物がはっきりわかって，興味をひき好評のようであった。以上が今年度の發音導入期におけるLL教室の使用狀況である。

ところで授業のための準備としてビデオ『初級漢語課本』上卷全48課を何度か見ているうちに，その構成がどうやら10課毎で1單元になっているように感じられてきた。時間をはかってみると第1單元が12分，第2單元が15分，第3單元が26分，第4單元が30分，第5單元が32分で，第1單元，第2單元などは，1回にひとまとめにして見せるのに適當な分量であり，さらに第1單元は內容も單純で，基本文型導入初期の教材としてはきわめて適當であると思われてきた。そこでビデオを學生に見せるにあたっては單元ごとにとりあつかうことにきめ，とくに第1單元はできるだけはやい時期に見せようと考えた。こうして授業の進度をにらみながら，すでに『新中國語』第16課を終了していた第4回のLL教室使用日に第1單元を見せることにきめた。すでにのべたように準備室のMさんの努力によってO先生との進度を調整するという問題は解決していたので，その日の授業は『新中國語』の方はすすめることなく，90分の授業をビデオの1單元を見せることと第1回聽覺テストにあてた（わたしが每年いく度かにわたって實施している聽覺テストというのは，學生の耳に中國語の意味の區別をもたらす音聲の對立點をききわける能力がどれだけ出來あがっているかを測定するもので，それによって學生の弱い個所を發見し，そこを强化させるためのものである。このテストにたいするわたしの考え方やその方法につい

ては，いずれ稿をあらためて紹介したいと思っている)。

その手順としてまずビデオを見せ，同時にその音聲を各自のブースでテープに錄音させた(これは教室外での復習のときのためのものである)。さらにビデオで戸惑いがないように，特別な事情があって畫面の文字は繁體字が使用されていること，「干什么」は「作什么」,「上哪儿？」は「去哪儿？」「zhèi, nèi, shéi」は「zhè, nà, shuí」と同じ意味であることを注意しておいた。觀察しているとビデオの中ですでに學習された簡單な中國語のいいまわしが出てくると學生の中から笑い聲がもれ，きわめて高い興味を示したが，すこし複雜ないいまわしがでてくると，はじめて聞くノーマルスピードで話される中國語に戸惑う學生がかなりいるようであった。

そのつぎに27分の第1回聽覺テストをおこなったが，この問題もビデオと同樣，各自のテープに錄音させた（これは成績のわるかった學生に教室外で何度か自己テストして，その結果を教師に提出させるためのものである)。テスト終了後には，その場でわたしが正解を教え，學生に自己採點させた（これは各自に自分の弱い個所をはっきり自覺させるためである)。あとで自己採點した答案を提出させてみると，一般に聲調のききわけが不十分であることが判明した。

授業の最後の段階ではあらかじめ用意しておいた第1單元のテキストを配布し，それを見せながら，ふたたびビデオを見せ，意味のわからないところを確認させて授業をおわった。

LL 教室を使用するにあたって，わたしがかねがね氣にかかり，まだいまだその確信がつかめないでいる問題のひとつに，學生がどれぐらいの時間のあいだヘッド・ホーンをつけていることに耐えられるかということがある。1回の練習ではせいぜい10分前後が限度ではないかと豫測はしているが，當節のようにウォークマンの全盛の世の中であるから，今頃の若者はもっと長時間の使用に耐えられるかも知れない。その間の事情がわたしには皆目見當がつかないのである。そこで幸い文學部の LL 教室のスピーカーの設置がとても理想的に出來ているので，いろいろのことがはっきりするまでは，LL 教室で學生にヘッド・ホーンをつけさせることは，聽覺テスト，リピート練習など必要最少限度にとどめることにしていた。したがってこのたびの90分の授業でも學生がヘッ

ド・ホーンをつけたのは聽覺テストの27分間だけであった。またビデオというものは１度や２度見ただけでは印象にあまり殘らないものであるから，教室外ではテキストとテープによる音聲を結びつけて復習させるほか，教室でも何回か見せることにし，この第１單元についても，そのあと２回の授業で，くりかえし見せた。

5. 實驗の試行錯誤とその修正

イ.「替换练习」の練習方法變更の失敗

今年度からLL教室使用にともなって，ランゲジ・ラボラトリーの裝置を使用して練習させるのに都合がよいように，『新中國語』の「替换练习」の部分の練習方法をテープのモデル發音をリピートさせる方法に變更したことはすでに３の部分でのべた。しかしこの變更は失敗であった。このことに氣付きはじめたのは第11課以後の基本文法の部分にはいってから間もなくのことであったが，第17課，第18課とすすむにしたがって，この疑いはますます濃厚なものになっていった。その頃はランゲジ・ラボラトリーの裝置を使用した練習は一度しかおこなっておらず，したがって學生自身にモデルの發音と自分の發音を比較對照して檢証させることは一度しかおこなっていなかったが，普通教室での毎回のテープレコーダーについての練習を觀察する限りでは，この方法をつづけることによって，學生の中國語の發音を次第に安定させてゆくことははなはだ心もとないと感じられたのである。

いままでの，まず各個の學生に語彙をいれかえていわせ，その間違った個所を指摘して自力で矯正させ，さらにその文を敎師のモデル發音にしたがって全員でコーラス模倣をする方法では，學生たちはすでに學ばれた語彙の發音と基本文型の理解を前提にして，試行錯誤をかさねながら，たびたびの練習の中で，自力でしだいに正しい中國語の發話の流れを習得していったが，はじめから正しい中國語の發話の流れを模倣させる練習だけでは，その獨立獨步の能力がなかなか着いてこないのである。この感想をたまたまそこに居あわせたM先生に話したところ，M先生は昨年１年間をとおして毎週１回わたしの授業を見學してくださっていて，いままでのわたしの「替换练习」の練習方法を熟知していたので，言下に今年度の「替换练习」の練習方法はわたしの敎授法の後退であ

り，その方法はただちに中止してもとにもどすべきであると忠告してくださった。それまでは練習方法變更にともなう學生諸君の動揺などのことも考慮して若干ためらっていたわたくしだったが，M先生のこの一言で決斷がつき，ただちに練習方法をもとにもどすことにし新しい模索にはいったのである。

普通教室での「替换练习」の練習方法の變更については，學生にそのことを宣言して實行にうつし，それでもなお，もとのリピートによる練習方法を要求する學生には，テープをダビングして教室外での練習に供せばよかったので，ことは比較的簡單だった。ただ問題は，では LL 教室では何を練習させるかということだった。すでに LL 教室では主要教材としてビデオを使用し，ノーマルスピードで話される中國語をききとる能力をのばさせようと考えていて，この點はいささかも變更はなかった。問題はランゲジ・ラボラトリーの裝置を利用して何を練習させるかである。

たまたまその週の木曜日はほかの先生が LL 教室を使用することになっていて，わたしの授業は普通教室に變更されていたので，1週間の餘裕はあった。それであれこれ考えた末，到達した結論はつぎのようであった。幸いすくなくとも1學期に關しては木曜日に2クラスの授業がおこなえることになっていたので，その教材を月，火，土の授業ときりはなして獨立させる。ランゲジ・ラボラトリーの裝置を利用しての教材としてはビデオ『初級漢語課本』に添付されたテープ教材を使用する。テープは各課ごとに 1)「生词」 2)「课文」（ビデオと基本的に同じ內容のものが，ビデオよりやや教科書朗讀風に錄音されている） 3)「练习」の3つの部分に分かれているが，教室では第11課からはじめて，授業の前半を使用して每回5課ずつ導入してゆき，ヘッド・ホーンを使用し，同時に各自のテープにも兩者の音聲を錄音して比較検討させるという方法で練習させる。「生词」の部分だけはあらかじめ漢字表記，ローマ字表記，日本語譯を印刷してあたえ豫習させておくが，その他の部分についてはテキストをあたえず，テープだけで練習させる。ただ「课文」以下のすべてをテキストなしにテープだけで意味をとらえ，それをリピートすることは困難だと豫想されたので，練習の重點として，「生词」はリピートと意味の理解，「课文」はききとりだけ，「练习」は正確なリピートに重點をおき，可能な限り意味を理解することもおこなうということにした。

こうしてその次の木曜から新しい內容でLL教室の授業をはじめたが，この授業形式は學生たちに好評であり，わたしもいちおう安堵の胸をなでおろしたのである。

ロ． 新教材の無理とその修正

LL教室の新しい教材がいまの1年生にとって若干高度すぎるという懸念ははじめからあったが，最初の授業における學生の反應が好評であったことから，ひょっとしたら豫想外にうまくゆくかも知れないという希望的觀測も持っていた。しかしその後實施された夏休みまでの計6回の授業における學生各自の練習の様子をコンソールのモニター裝置を利用して詳細に觀察していると，テープから流れる音聲を適確にとらえ，それを正確にリピートすることは，大部分の學生にとって，かなり困難な作業のように感じとれたのである。そこでこの點を確認するため，夏休み前の第1學期の期末テストでアンケートをとってみたのである。

ここではそのアンケート全體の集計結果を紹介する紙面をもたないが，そのうちの「教室でのテープによる練習の方法を途中で變更したが，中國語の習得にとってどちらが役立つと思うか」という設問にたいしては，V，W 2クラス計106名の回答者のうち，はじめの「替换练习」のリピート練習の方と答えたのがわずか2名，その他の方法があると思うと答えたものが4名で，殘りの100名が現在の練習方法を支持していたが，そのうち81名までもが，現在の練習の方がよいがテープのスピードがはやすぎて意味がつかめず，正しくリピートできないと答えていた。わたしの推測はやはり適中していたのである。また時間を節約するため兩者の錄音を比較検討させることは，時間の餘裕があるときを除き教室では實施せず，基本的に教室外の復習にまかせていたが，この點については「モデルの發音と自分の發音を比較してきくことは自分の中國語の發音の矯正に役立つか」という設問にたいしては106名中の94名がとても役立っている，まあまあ役立っていると答えながら，「そのテープを家でききなおして練習しているか」という設問にたいしては，よく練習しているが8名，あまり練習していないが83名，練習していないが10名とあって，教室內で時間をとって比較検討させることがきわめて重要であると痛感された。このアンケートの結果を2學期の授業にどのように反映させるか，これが夏休みのわたしの課題

となった。

ところで夏休みまでの授業においては，ビデオ教材についても，學生がその內容をどれだけ理解できたかはすべて學生たちの自己判斷にまかせ，毎回の授業でビデオが終るごとに，1）ほとんどわかった　2）3分の2わかった　3）半分わかった　4）3分の1わかった　5）ほとんどわからなかった　の5項目にわけて學生に擧手させ，その數で學生の理解度を判斷したが，果して本當にどれだけ正確にわかっているかについては，はなはだ心もとなかった。これはもっと別の方法でチェックする必要があると感じていた。

夏休みにはいる直前，準備室のMさんから，おそらく第2學期についても2，3回をのぞいては第1學期同樣の形式でLL教室が使用できそうだという情報を得たので，以上のふたつの問題を解決するため，わたしが夏休みいっぱいかけて考えだした第2學期のLL教室での練習方法はつぎのようなものになった。

第1點，ビデオ教材については單元としてまとめてみせることをやめ，方法を考えて別の手法で見せてゆく。これは實驗の出發からわたしが一貫してもっていたノーマル・スピードで話される中國語をききとる能力を强化させるためのものである。

第2點，他方，正確な中國語の發話の流れを安定させるために，ランゲジ・ラボラトリーの装置をつかって，リピート練習，文型の轉換練習などの手法で練習させる。そのリピート練習の教材としては第1學期にいち度やめてしまった「替换练习」の部分を復活させ，文型轉換練習などについては，すでに學ばれている『新中國語』の中からあらたに問題を作成し，それをテープに錄音してあてる。ただ「替换练习」については第1學期のようにまだ學ばれていない新しい部分をやるのではなく，すでに普通教室で練習をおえたもののなかから，適宜選擇してブースを使用してリピート練習させる。ビデオ教材については第1學期の終りの部分で第3單元である21～30課をいちど見せているが，第2學期には別の手法でもういちど第21課からはじめる。

つぎに1回の具體的な授業のすすめ方を紹介すればつぎのようになる。まず授業への準備作業として，前日までにその回で練習を豫定するランゲジ・ラボラトリー用のテープ教材を作成し，その全プログラムの時間をはかる。たとえばそれが約13分かかるとすれば，學生にききなおさせる時間もいれて約30分近

くの時間が必要であることがわかる。

わたしは普通教室では授業開始時間前に教室にでかけてゆき，時間きっかりに授業をはじめることにしているが，LL 教室の授業で時間きっかりに新しい教材の授業をはじめることは，おくれてくる學生にすこし酷なような氣がしたので，授業開始時間がくると，復習の意味で5分乃至10分前後かけて，すでに學ばれた部分のビデオを見せることにしている。このことによっておくれてくる學生をすこし待つことができるし，はやく來ている學生は時間をむだにしなくてすむことになるからである。

つぎにいよいよ新しいビデオ教材の投入である。第1學期同様，その課にあらわれる「生詞」については，印刷しあらかじめ學生に渡しておいたが，その他は一切あたえず，まずその課全體のビデオをひととおり見せる。つぎにはじめまで巻戻し，こんどは登場人物の發話ごとに畫面を停止させ，學生を指名して，その發話の意味をいわせる。わからないときは，その部分を何度かくりかえして見せ，それでもわからないときは，わたしがかわってその發話をいって見せる。それでもわからないときは，別の學生を指名して意味をいわせる。以上のような手續で登場人物の發話をつぎつぎとチェックしてゆき，そのすべてが終った段階で，仕上げとしてもういち度その課を見せ，その課の練習のすべてをおさえる。このようにして時間の許す限りつぎつぎと練習をつづけ，あと30分前後をのこす區切りのよいところに來た頃を見はからって，ビデオを見る練習をきりあげて，ヘッド・ホーンをつけたブースによる練習に移ってその回の授業を終える。

わたしが苦しまぎれに考え出したこのようなビデオを見る練習方法は，學生たちに意味を積極的にききとる努力を强制することになったようで，回をかさねるごとに，學生のビデオの意味を理解する能力がのびてゆくのが，目にみえてわかるようになった。こうして實驗開始半年の試行錯誤と悪戰苦闘のすえ，やっと自分でも納得できる LL 教室の初歩的な使用しかたにたどりついたのである。

6. むすびにかえて——ひとつのテスト結果

LL 教室を利用しての授業については，今年度はすべて零から出發していた

ので，その授業を圓滑に實施するため，授業内容の選定や配分，それにLLコントロール・コンソールの初歩的な操作方法に慣れることに懸命であって，他のことにはぜんぜん頭がまわらなかった。かつて同じ機種をそなえた日中學院のLL教室を見學したとき，學生のテストを實施することもできるときいたことがあり，また取扱説明書にもそのことが記されていたが，その機能を驅使するにはおそらく複雑なコンソールの畫面操作が必要にちがいない，それに取り組むのはコンソールの操作にうんと習熟したはるか將來の問題であると考えて，そのことは全然問題にしないでいた。

ところが2學期の後半になって，ある日準備室のMさんからプリントが渡されたのである。それにはアナライザーの機能のあらましがのべてあり，お申し出があれば操作のお手傳いをしますとあった。そのころわたしはすでにLL教室での授業のすすめかたについて，やっと自分なりに納得のできる方法をさがしあてていたので，精神的な餘裕があったのか，ふとこのアナライザーの機能に挑戦してみようかという氣になったのである。取扱説明書をとり出してよく讀んで見ると，テストのやり方は，マークシート形式の出題方法と同じで，出題數は最高30問，選擇肢の數は最高5。畫面のボタンを選擇することによって，1）各學生の正答數　2）各學生の正答率　3）各學生の席次　4）問題ごとの正答率　5）各問題にたいする學生の反應率を集計してプリンターで打ち出すことができる機能があることがわかった。

ただ，ただちに適當な出題を30題考え出すことは至難の技だったので，とりあえず手許にあった北京語言學院來華留學生三系編集の『初级汉语课本・听力练习 1. 2』のなかから適當なもの30題をえらび出し，未習の語彙については修正を加え，早速教室でテストを實施してみた。だが，なにしろはじめての畫面操作だったので，何度か操作ミスをかさね，またたまたまそのときは機械の方でも故障していて，その集計をプリンターに打ち出すことができず，そのテストはテストのテストにおわってしまって結果を出すことができずに終った。しかしその1回のテストで，わたしは畫面の操作にかなり慣れることができたし，テストのあと學生の申し出で，わたしの錄音した出題のテープの音量が小さすぎ，はっきり聞きとれない部分があったことがわかって，そのつぎの出題のテープを作成するときの參考になった。

しかしそのつぎに實施する2度目のテストに同じ問題を出すことはできないので，あらたに30題をえらびだすことにした。前回では30題とも文を正しくききとる能力についてテストしたが，今回は文を正しく理解して聞いているかどうかの點についても知りたかったので，15題はそれにあてることにした。

文を正しく聞きとる能力のテストではたとえば「今天四月五号。我们下月去长城。」という文をまず聞かせ，つぎに「问：他们几月去长城？」と質問を發し，「一，四月　二，五月　三，三月」の選擇肢を出して學生にボタンを押させる。2のボタンを押せば正解ということになるのである。

文を正しく理解しているかどうかを知るテストでは，たとえば「阿里刚做完练习。」という文をいってから「这句话的意思是　一，阿里在两个小时以前做完了练习。二，阿里在两分钟以前做完了练习。」と選擇肢を出してボタンを押させる。學生が2のボタンを押せば正確ということになるのである。この文を正しく理解しているかどうかを知るテストでは，「刚，好几本，有时候，一个小时，忽然，商店开门，可不是，一～就～，半天，坐火车去，要是～，离开A去B」などの15題を出題した。「好几本」は『新中國語』ではまだ學ばれていなかったので，さすがに出來がわるく，正解率はVクラスでは33％，Wクラスでは20％だったが，すでに學ばれた語彙や文型についてはかなりよい線をいっていた。

機械が打ち出した30題全問についてのV，Wそれぞれのクラスの學生の正答率分布表はA表のようであった。

わたしは平素の授業においても，今年度の1年生は全體として，わたしの擔任であるVクラスよりO先生の擔任であるWクラスの方が，毎回の授業の出席率もよいし，なにかにつけてよく出來ると感じていた。これは普通教室の授業で各學生を指名して答えさせ，またLL教室でビデオ教材の內容をチェックしてゆくなかで，わたしが得ていた漠然とした印象的評價であった。しかしこれはあくまで教師としてのわたしの勘にたよった評價であって，それを客觀的に證明するものは何もなかった。ところが今度機械が打ち出した正答率分布表を見てみると，Vクラスでは50—60％のところに最高の山ができていたが，Wクラスでは60—70％のところに最高の山ができているのである。このことはすくなくとも中國語を聞きとる能力では，今回出題した30題の範圍ではVクラスよ

A表　全問の正答率と學生數

	Vクラス49名		Wクラス50名	
0— 10%				
10— 20%				
20— 30%	2％	1名		
30— 40%	6％	3名	2％	1名
40— 50%	20％	10名	10％	5名
50— 60%	35％	17名	26％	13名
60— 70%	27％	13名	32％	16名
70— 80%	8％	4名	28％	14名
80— 90%	2％	1名	2％	1名
90—100%				

りWクラスの學生の方が全體的にすぐれていることを客觀的に証明するものである。

いままでわたしが長年にわたって取組んできた入門期における中國語教授法の實驗では，その教授法の効果を客觀的に証明する資料を提出することがきわめてむずかしかった。しかしこのLLコントロール・コンソールのアナライザーの機能を驅使し，いろいろと設問を工夫してゆくならば，口頭發表能力をもふくめての學生たちの習得した中國語の全能力を客觀的に評價することはできないが，すくなくとも學生の中國語を正しく聞きとる能力は客觀的な資料によって評價できそうな氣がしてきた。これはおそらく將來わたしの實驗の有力な助手になるにちがいない。

各個の學生についての分析をみれば，平素の授業で，中國語の發音の安定度，語彙・文型の把握度，聞きとりの能力など，すべての點ですぐれているとわたしが評價していたVクラスのAという學生は，このたびのテストでも30題中23題が正確で正答率77％，クラス中2位をしめており，その他の學生についても若干の見込みちがいはあったが，このたびのテストではほぼわたしの豫想していた成績があらわれていた。

ただ，このアナライザーの機能は，同時にわたしが平素の授業では發見でき

なかった學生の別の側面をも教えてくれて，わたしに問題をなげかけてもいた。たとえばVクラスのBという學生は平素の授業ではきわめて熱心であり，教室外でも努力しているようであるが，どうも中國語の發音がいつまでたっても今ひとつ安定しないでいた。わたしはひょっとしたら，この學生は中國語を正しくききとる能力が弱いのではないかと，ひそかに思っていた。ところが今度のテストでは30題中25題が正解で正答率は83％，クラス中トップであったのである。正しく音を聞きとれてこそ正しく音を發音できるというのがわたしの持論であり，わたしの教授法のなかにも，そのことが随所に反映されているが，ひょっとしたらこの點を修正しなければならない事態がおきるかも知れない。いっぽうWクラスのCという學生は，VクラスのAにまさるともおとらない學生だと平素の授業で評價していたが，このたびのテストでは，30題中正解がたった13題，正答率は43％で50名中46位なのである。この事實をどのように解釋すればよいのであるか。これも殘された研究課題のひとつである。

以上でLL教室を組み入れた中國語入門教育第1年目の試行錯誤，迂餘曲折に滿ちたわたしの實驗報告をおわるが，來年度は今年度のこの貴重な經驗を肥料として，新しいより効果的な第二年目のカリキュラムを構築しなければならないだろう。